The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	日本占領期におけるビルマ作家協会機関誌『作家』の役割について
Author(s)	南田, みどり
Citation	大阪大学世界言語研究センター論集. 2011, 5, p. 143-171
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/4240
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

日本占領期におけるビルマ作家協会機関誌『作家』の役割について

南　田　みどり*
MINAMIDA Midori

Abstract：

The Role of "Writer", the Journal Published by Burmese Writers' Association during the Japanese Military Occupation (1942-45)

"Writer" was a journal whose chief was Journalgyaw U Chit Maung, and assistant editor was Zawana, who published the first issue (84pages, 100sen) in December 1942. In 1943, during the period from publication of No. 2 to No. 9, the number of pages reduced gradually. No. 2 to No. 7 contained 70 to 80 pages, No. 8 (a special number for 'Independence') contained 64 pages, and No. 9 contained 40 pages. In addition, prices rose in 1944, No. 10 (special number for new year) contained only 40 pages but cost 200 sen, and No. 11 cost 300 sen. We have not found issues available after No. 11 yet.

Under the Japanese occupation, Burmese publication had no choice but contribute to the propaganda of Japanese Army. The fundamental policy of Japanese propaganda was, first, to make Burmese people understand the significance of the Greater Asia Co-prosperity Sphere and to conduct the Greater Asia War, and second, to encourage them to co-operate with the Japanese. It should also be noted that Japan's fundamental cultural policy was to reject English culture, to spread Japanese culture and to promote Burmese culture.

Nevertheless, most of the fiction related neither the importance of the co-operation with Japan nor the Greater Asia Co-prosperity Sphere. Some kept away from Japanese propaganda in the entertainment genre, others used the chance to enlighten Burmese readers and audiences.

Short stories in "Writer" might also well be called entertainment and enlightenment as is the case in long novels. The authors paid more attention to content. In short stories every sentence has a more important meaning than in long novels. These short stories neither described any Japanese characters, nor wrote Japanese propaganda [Minamida 2007: 128-132].

＊　大阪大学世界言語研究センター・教授

"Writer" consists of various items. They are current affairs, foreign affairs, narrating experiences of War, Burmese culture and history, introduction of Japanese culture, translation of Japanese literature, and Burmese literature such as short stories, poems, songs, folk tales, book reviews and essays on classics etc. This paper examined the features of each item except short stories and considered the general role of "Writer" under the Japanese Occupation.

Keywords：Japanese military occupation, Burmese literature, writers' association, Burmese magazines
キーワード：日本占領期，ビルマ文学，作家協会，ビルマ雑誌

はじめに

日本占領期（1942–45）のビルマにおいて，出版事業は日本軍の宣伝活動の一環と位置づけられた。出版界は，第一に文化的にイギリス色を払拭し，第二にこれに代わって日本文化を普及し，第三に併せてビルマ文化を振興するという日本軍の対ビルマ文化政策の基本の枠内での出版活動を余儀なくされた。とはいえ，この期間に出版された小説を中心に文学作品を概観した限りでは，日本占領期のビルマ文学は，第一に娯楽的役割，第二にビルマ人を対象とした啓蒙・風刺的役割，第三にビルマ人の独立国家建設への自覚を促し，その国家建設の中心的な担い手となるべきビルマ軍の密かなプロパガンダ的役割を果たすにとどまり，日本人の明確な形象はおろか，日本文化の宣伝を前面に立てた作品も見出されなかった［南田 2010］。

本稿では上記を踏まえて，日本占領期にビルマ作家協会[1]機関誌として創刊された『作家（Saye Hsaya Sazaung）[2]』が果たした役割を考える。すなわち『作家』が，小説を中心とする文学作品に見られたと同様の役割を果たしたのか。それとも，それ以外の役割をも果たしたのかを確認するものである。

ここで対象とするのは，現時点で収集可能となった 1 号（1942 年 12 月創刊）から 11 号（推定 1944 年 6 月–7 月発行）まで[3]の 11 点である。ここでは，これら 11 点の外形的特

1　1940 年初頭に結成された後，自然消滅し，日本占領期に再建された。詳細は［南田 2010a: 113–114］［Shwe Hmya1972: 345］を参照されたい。再建日は『作家』1 号 p. 41 でビルマ暦 1304 年ワーガウン月（西暦 1942 年 9 月 9 日）とされる。［南田 2010a: 113］で再建日とした 9 月 13 日は，規約等が承認された第二回総会開催日である。

2　'Saye Hsaya' は，作家，文筆家等を意味し，'Sazaung' は，雑誌，ジャーナル等の定期刊行物を意味する。創刊号のみ "Saye Hsaya Lazin Sazaung" と銘打たれる。'Lazin' は「月刊」を意味する。

3　2002 年 9 月から 3 ヶ月文部科学省在外研究員としてヤンゴン滞在時，大学中央図書館所蔵の 11 点の閲覧後，館長に複写許可を申請したが，文学関係以外の記事の複写申請は却下された。後日別途マクロフイルム（UNIVERSITIES CENTRAL LIBRARY MICROFILMS, FILMED DATE Oct. 1977, U.C.L., PHOTOGRAPHIC SERVICE, RANGOON, BURMA ）の入手で，全巻複写が可能となった。『作家』が用紙不足で停刊になったとする［Yan Aung 1973: 839］では，作家協会実施の「親の恩」作文コンテスト入選作品が『作家』に載ったとされるが，11 号までには関連記事が見出せない。日本占領期の詩を扱う［Hla Htun 2004: 1］では，『作家』1，2，5，9，11，13 号を参照したと述べられ，［Pyi Soung 2009: 78］でも 13 号が検閲で大幅に削除されたことに

徴と掲載記事の特徴からその役割を考える。それに先立ち，以下でビルマ国内における叙述から，『作家』に関する認識を概観しておきたい。

2.『作家』をめぐる叙述

日本占領期のビルマ文学に関しては，現在も正確でまとまった叙述をビルマ国内で見出すことが困難である。その要因のひとつは，当時の出版物そのものの入手・収集の困難さにある［南田 2010: 110–111］。『作家』についても，断片的な叙述が多い。

たとえば，ビルマ・ジャーナリズムの歴史を概観する代表的叙述2点のうち1点は，「用紙不足と日本軍政の統制でジャーナリズムが停滞していた時期」に，日本の支援によって出版された『作家』は「面目躍如」の感をもたらしたが，「諸困難により支援が得難くなり」停刊となったと述べる［Ba Than 1978: 96］。もう1点は，1943年発行の『作家』のみを参照して，そのサイズ，編集者名，価格，記事内容を簡単に述べるにとどまる［Hkin Maung Htun 1975: 242］。

それのみならず，不十分な記述も少なくない。たとえば『ビルマ文学辞典』では，『作家』が9号まで毎月出版されたと述べて，1号と2号の内容を簡単に紹介する。さらに，同誌が「作家協会のオピニオン誌（Abaw Sazaung）として発行され」，創刊は「1304年文学者の日記念」であった［Malihka 1974: 82］とされる。しかし，これは事実誤認に過ぎる[4]。

一方，日本占領期の出版界にかかわった作家ピーソン（1927生）[5]の回想録『第二次世界大戦中日本の支配下にあった頃』は，当時の事項全般にわたって叙述し，『作家』の概略にも言及する。そこでは，日本軍が作家協会を結成し，雑誌『作家』の出版によって読者の啓発と日本文化の紹介を意図したとも述べられている［Pyi Soung 2009: 382–383］。

たしかに『作家』の発行は，日本軍の文化政策の重要な一環とされた。軍宣伝班が「結成せしめた」作家協会は，「大衆雑誌を刊行し索漠たる民衆を啓発すると共に日本文化を紹介する」ために機関誌『作家』の発行を急ぎ，12月8日の開戦一周年記念日に創刊にこぎつけ，「以来一般民衆の好評を博し，ビルマ敗戦まで十数号を発行した」とされる［太田 1967: 192］からである。

言及され，その発行を太陰暦のビルマ暦第十二の月である「ダバウン月」とされる。11号の推定発行年月は1944年6月–7月であり，次に訪れる「ダバウン月」は翌1945年2月11日から3月12日である。3月27日にビルマ軍による抗日蜂起が開始し，5月には連合軍がラングーンを制圧しているので，1944年8月から1945年3月までの期間に12号13号が発行された可能性は考えられる。

4　ビルマ暦の年号に通常638年を加えると西暦年となり，1304年は1942年となる。同じ［Malihka 1974: 24］でも記されるが，「文学者の日」は，『作家』創刊1年半後の1944年5月に制定委員会が発足し，毎年ビルマ暦第9の月ナドー月（およそ太陽暦の11–12月）白分第一日に催すことが決定され，1944年は11月15日に第一回が挙行された。［南田 2010: 115］も参照されたい。事実誤認は，日本占領期の出版物に比較的多く言及するタキン・ルィン［南田 2010: 111］でも見られ，『作家』が3ヶ月に一回刊行され2号で休刊となったとされる［Lwin 1968: 336］。同様の記述が2009–2010年度の10学年用のビルマの国定歴史教科書にも見られる［Kyaundhoung Saouk Committee 2008: 69］。『作家』掲載記事と作家名等を列挙する［Htay Maung 2002: 137］も，発刊は1年近く続いたとする。なお，『作家』掲載の詩歌や児童文学に関するビルマ国内における記述も若干存在するが，それについては後述する。

5　本文中の人名の次の（　）内では，生存者の場合には生年のみを，物故者には没年も示す。

これらの叙述からすれば，『作家』にはその創刊時から民衆の啓発と日本文化の紹介という役割が与えられていたことになる。しかし，作家協会結成が必ずしも日本軍の「指導」の帰結とはいえなかった[6]のと同様に，雑誌『作家』にも，その編集・発行に従事したビルマ作家たちの側のさまざまな思惑による役割が存在したのではあるまいか。以下に『作家』の外形的特徴と掲載記事の特徴をとらえる中で，『作家』の役割を確認したい。

3．『作家』その外形的特徴

3．1『作家』その外観

『作家』各号の掲載記事に通し番号を付し，題目を邦訳し，掲載記事の分野，写真・図の点数，著者名，頁とともに巻末の「表5『作家』掲載記事一覧」に示した。これにもとづき，本稿で以後『作家』掲載記事に言及する場合，1号の1を1-1，5号の3を5-3などと表示することとする。元来『作家』には目次がない。頁数の記載されない箇所もある。たとえば，1-1は特別付録とされて頁の表示がないが，1号の6頁以降は部分的に頁表示があるので，逆算して1-2の開始頁をp. 2としている。

『作家』は横23センチ縦30センチで，表紙には，誌名，号数，発行年月，写真または図，価格[7]などが掲載される。これら表紙掲載事項を，頁数，色刷り状況とともに「表1『作家』表紙掲載事項等」に示した。号数，価格等の記載がない場合は，無と表示した。発行年月の表示はまちまちであり，ビルマ暦の月のみ，西暦との併記，無記載，特集号とのみ記されたものなどがある。表1の発行年月欄上段には，記載どおりの発行年月を表示し，（　）内に必要な事項を推定して補足した。なお巻頭論説に年月が記載される場合は，（　）内に下線部で示し，それがビルマ暦のみの場合は，西暦に換算[8]して補足した。

6　注1で述べた通り，ビルマ作家にとっては，「再建」という意識があり，軍宣伝班の「指導」は再建の好機ととらえられた。［南田 2010: 113-114］も参照されたい。

7　英領時代通貨は64進法で，1チャットが64ピャーであった。日本占領下で軍票が発行され，10進法が採用され，1チャットが100ピャーとなり，1銭は1ピャーと等価とされた。［Hla 1968a: 247-248］を参照されたい。

8　ビルマ暦から西暦への換算は，1901年1月から2002年12月までのビルマ暦・西暦を併記する［Tint Win Naing 1973］を参照している。注3と 注4も参照されたい。

9　1897-1967。 陸軍大佐で，1940年に，日緬協会書記長南益世と称してビルマに入り，アウンサンら2名の出国を知って，2名をアモイで拘束して東京へ連行した。1941年2月に設立された謀略機関・南機関の長となって，30名のビルマ青年（三十人の同志）を密出国させて，海南島で軍事訓練を施した。同年12月8日に，バンコクでビルマ独立軍（BIA）を結成させ，南大将，雷将軍（Bo Mogyouk）を名乗り，最高司令官として日本軍と同時期にビルマ国内に進軍させた。1942年6月に，南機関は廃止となり，鈴木は東京へ異動した。なお「三十人の同志」は日本側の資料で「三十人の志士」とされているものである。「志士」にあたるとされるビルマ語 'yebaw' は，「軍人，兵士，戦友，同僚，仲間，同志」を意味するため，ここでは「同志」と訳出している。また，「ビルマ独立軍」も日本側の資料では「ビルマ独立義勇軍」とされることが多いが，ここでは，ビルマ語ならびに英語と同等の訳語である Burma Independence Army の邦訳を使用している。

10　軍政監部の「指導」で，1942年6月に結成された。日本側の呼称は東亜青年連盟（Asha Lunge）である。知育部と体育部があり，1943年7月には13歳から30歳の男女会員2万を擁したとされるが，共産党のオルグや抗日の隠れ蓑としても活用された。［太田 1967: 259］［南田 2010a: 123］も参照されたい。

表1 『作家』表紙掲載事項等

号数	発行年月	価格	頁数	色	表紙図柄
無	12月・ナドー月 （1942年）	100銭	84頁	二色	図 巨大なペンを持つビルマ作家群像
2号	ピャードウ月-1月 （1943年）	100銭	76頁	五色	図 モダンなブラウスと短めのロンジーを着用し日傘を持つビルマ女性
3号	2月-ダボドゥエー月 （1943年）	100銭	76頁	一色	写真 体操着で跳躍する3名の日本女性
4号	新年特集号 （1304年ダバウン月 1943年3月6日-4月4日）	100銭	80頁	一色	写真 法隆寺の五重の塔と仁王像
5号	無 （1305年カソン月 1943年5月）	100銭	76頁	一色	写真 軍服姿の鈴木敬司[9]
6号	無 （1943年6月）	100銭	72頁	一色	図 ロンジー姿で体操する3名のアジア青年連盟[10]員女性
7号	安居[11]入り特集号 （1943年7月1日より 安居期間）	100銭	72頁	一色	図 供花を持つ横座りのビルマ女性
8号	独立特集号 （1943年8月1日独立宣言）	無	64頁	一色	写真 ビルマ国総統バモー[12]博士
9号	無表示 （ワーガウン月 1943年8月1日-8月29日）	100銭	40頁	一色	図 苦悶の表情で枕木をかつぐ労務者の背景で男性2名が手で砕石し女性1名が石を載せた籠を担ぐ泰緬鉄道[13]建設現場
10号	世界新年特集号 （1943年12月または 1944年1月[14]）	200銭	40頁	一色	写真 波状の雲
11号	無 （ワーゾウ月 1944年6月20日-7月19日）	300銭	40頁	一色	図 巨大なペンを3本立てた殉難者記念碑

表紙には，上記以外にも記載事項がある。たとえば1号表紙には，17名の執筆者名と

11 ビルマ暦第四のワーゾウ月（通常6-7月）から3ヶ月，仏教徒が戒律を特に遵守して結婚や新築を控える雨安居に入る。閏年にはワーゾウ月が2回訪れる。日本占領期では1942年と45年が閏年であった。

12 1893-1977。英領時代に弁護士，下院議員を経て，1937年，ビルマ統治法施行後初代首相を務め，1939年に不信任決議により野党党首となった。1940年に逮捕されたが，1942年に日本占領下で中央行政府委員長を務め，1943年8月に「独立」ビルマの国家元首となった。

13 鉄道の建設期間は42年11月から43年10月であった。労務者募集は，第一次が43年3月，第二次が43年5月，第三次が43年7月であり，図は7月の募集に呼応したものと考えられる。

14 10-2の記事で，1月23日の作家協会会議開催を告知し，近日中に召集状を会員の元に送付する旨述べられる。ゆえに1月23日以前の発行と推測される。

共に「特別付録ビルマ防衛軍[15]」と記される。表紙の図の説明は記されないが，１号では1-2に関連記事がある[16]。

表紙11点の図柄のうち，日本関連は3号，4号，5号であり，いずれも写真が使用され，誌上で関連記事がある。うち「日本の未来の母」との説明が付される3号の表紙写真は，軍国主義文化の表出ととらえられる。4号の表紙写真は日本の伝統文化に関するものである。一方ビルマ関連は，8号を除きいずれも異なる画家の手になる絵画である。このうち，6号のアジア青年連盟員女性図像や，8号のビルマ国総統写真や，9号の労務者図像などは，ビルマ人の士気を昂揚させる効果を狙うものである。その意味で表紙図柄は，おおむね日本文化紹介と民衆の啓発という所与の役割に応えるものであった。ただし画家名は記載されず，6号と9号の図には説明も関連記事もない。

発行年月から見ると，当初月刊と銘打たれた『作家』は，一ヶ月28日からなるビルマ暦に沿って，4号までは順調に発行された。4号と5号の間にやや間隔はあるものの[17]，9号まではほぼ月刊誌の体裁を保った。ただし頁数から見ると，創刊号では84頁あったものが，以後徐々に減少し，9号以降は40頁に半減する。それとは対照的に，価格は10号で2倍，11号で3倍と跳ね上がっている。1943年8月の「独立」直後からの『作家』の価格高騰と誌面の減少は，「独立」ビルマにおける民衆生活の困難をも垣間見させた。

次に掲載記事の構成を見ていくこととする。

3．2　『作家』その構成

掲載記事をビルマ関連と日本関連とに分け，巻末の表5では，前者をＢと，後者をＪとして題目の右に示した。両者に関連しない海外記事は，Ｏで示した。さらに，掲載記事を便宜上，①小説，②童話・民話等，③詩歌，④論説・記事等，⑤作家協会関連の５つの分野に分類した。たとえば，ビルマの小説はＢ①，日本の民話はＪ②などとして示した。

15　1942年6月の軍政布告後，1万人余のビルマ独立軍は，7月に2800名のビルマ防衛軍（BDA）に縮小再編され，第15軍司令部傘下に入り，1943年3月にビルマ方面軍の下に組み入れられ，1943年8月の「独立」後，ビルマ国軍（BNA）となった。

16　その他の表紙記載事項は，2号で「特に，日本の教育，ダガウン国の歴史的問題，服装改革等の評論を読み，考え，論議されたし」と記される。また，図の説明はないが，2-4が関連記事である。3号では，「日本の未来の母の写真，子供の母の記事参照されたし／マウン・パウチャインはビルマ人でなくインド人という／いかなる夫を迎えるか／真の乙女／別れないよ／インドセンダンの樹の又／国軍／屍の上を牛車で越える強行軍／注意！転べば起きよ／読まれたし震撼せしめる小説随筆揃い」との記事広告が記される。4号に14点の記事・論説題名が記される。5号表紙には，「勝利の地（Aung Mye）」の文字が2箇所に記され，21点の記事・論説題名が並ぶ。表紙の写真は，5-14の記事内容に関連する。6号表紙には，小説5点，論説11点の題名，雑誌執行部5名の名が記される。7号表紙には5号に続き「勝利の地」の文字が2箇所に記され，雑誌執行部名簿，小説6点，記事・論説14点の題名，7-1の詩が並ぶ。8号表紙には，小説5点，論説11点の題名と作家協会執行部名簿が並び，表紙写真は8-24の記事内容に関連する。9号表紙に作家協会新執行部名簿，顧問名，図書館，講演，法律各責任者名簿と雑誌執行部名簿が並ぶ。10号表紙の写真には「大東亜世界から輝ける太陽，夜明けを迎え光を放つ」との説明が付き，配信元は読売新聞社が1943年7月より発行した英字紙Greater Asiaとされる。11号表紙の図には「国家のために命を捧げた殉難者を記念する殉難者記念碑の図」との説明がある。

17　4号のダバウン月は，ビルマ暦1304年の最後の月で，太陽暦の1943年3月6日-4月4日にあたる。5号は，これに続く1305年の新年タグー月（1943年4月5日-5月3日）の発行となるべきところが，1305年第二の月カソン月（1943年5月4日-6月2日）発行と表示される。

それにもとづき,『作家』の分野別収録点数を以下の表２に示した。また点数の横の（　）内には日本関連記事の点数を，〈　〉内にはその他の外国関連記事の点数を内数として示している。

表2『作家』分野別収録点数

	①小説	②童話等	③詩歌	④論説等	⑤協会	計
1号	5(1)	0	0	18(7)	5	28(8)
2号	5	1	4(1)	15(6)	5	30(6)
3号	4	2(1)	0	20(4)	7	33(5)
4号	7	2(1)	1	16(3)	2	28(4)
5号	6	1	4	16(2)	4	31(2)
6号	4(1)	2(1)	0	17(2)〈1〉	7	30(4)〈1〉
7号	6(1)	1	5	15(3)	5	32(4)
8号	4	0	1(1)	15(3)	5	25(4)
9号	2	1	5	11(4)〈1〉	4	23(4)〈1〉
10号	1	1(1)	4	13(5)	3	22(6)
11号	5	0	2	8(2)	3	18(2)
計	49(3)	11(4)	26(2)	164(41)〈2〉	50	300(50)〈2〉

収録点数の過半数を占める分野は，④論説・記事等である。⑤協会関連がそれに続く。ただし，協会関連には長文のものは少ない。会員向けの短い伝達が多く，同じ内容のものが複数回掲載される場合もあり，頁数では①小説を下回る。小説は毎号掲載され，誌上を飾った。しかし，9号10号で点数が激減し，11号で回復の兆しを見せる。②童話・民話と③詩歌は，掲載のない号もある。『作家』は児童向け雑誌ではない[18]が，②が掲載されたことは注目される。

④論説・記事等が過半数を占めるのは，便宜上①②③⑤に分類できないものすべてを④に含めたためでもある。これをさらに，a時事，b戦争，c歴史，d文化，e国語，f文学，g倫理，h教育，i経済，jその他に細分した。巻末の表５では，たとえばビルマの時事をB④a，日本の文化をJ④dなどとして示した。同じ「三十人の同志」関連であっても，3-1は「独立」における意義を叙述した時事解説であるので，B④aとしており，4-7はビルマ独立軍誕生に関するものであるので，戦争に分類してB④bとしている[19]。

また，写真や図が掲載される場合は，表５で（　）内にその点数とともに表示した。表紙同様，写真はほぼ日本関連の記事のみに使用される。そして図は，ビルマ関連の記事に限って使用される。図にはロゴ的なものも含めた。

なお，各号の末尾に，掲載広告の商品名とその掲載箇所を提示した。日本製品の広告は皆無であり，ビルマ関連の広告のみであった。

18 『作家』の発行部数は明示されないが，購読者として，第一に作家協会会員，第二に会員以外の作家，第三に一般成人が対象とされたと考えられる。

19 「三十人の同志」とビルマ独立軍については注９を参照されたい。

『作家』収録記事は合計300点ある。そのうち，日本関連の記事は50点であった。それは，全体の六分の一にすぎない。収録点数を見る限り，作家協会結成時に与えられたという「民衆の啓発」と「日本文化紹介」なる二つの役割のうち，編集の重点が必ずしも後者には置かれていなかったことがうかがえる。

次に，以下の4で日本関連記事の特徴を，5でビルマ関連記事の特徴を見ていくことにする。

4．『作家』の日本文化紹介

『作家』が紹介した日本文学には，小説，御伽噺，詩歌がある。小説として紹介されたものは，1-24「大久保村の居候犬」（原題「家畜」，1906，島崎藤村），6-22「煙草と兵隊」（1939，火野葦平），7-21「息子」（原作は戯曲，1922，小山内薫）の3点である。7-8に火野葦平紹介がある。

御伽噺として紹介されたものは，いずれも小泉八雲（1850-1904）の作品であり，3-14「鏡の乙女」，4-14「梅津忠兵衛」，6-18「黄泉の国帰り」（原題「閻魔の廳にて」），10-20「キンフニンメエ」（原題「雪女」）の4点である[20]。これらは，必ずしも忠実なビルマ語訳とはいえず，6-18は「意訳」，10-20は「翻案」と明示される。

詩歌として紹介されたものは，2-19「修行者の言葉」（野口米次郎）とその作者紹介である5-29「ヨネ・ノグチ」，「海ゆかば」を翻案した8-13「兵士」，和歌8編の訳と解説1-20「ニッポン古典詩」の5点である。

上記の作品は，原著名やその出版年の表示のないものが大半である[21]。これら文学作品は量的にも少ないうえ，同時代の日本文学の代表的作品を厳選したと見るには無理がある。日本文学はビルマ人読者に紹介すべき分野とみなされず，形ばかりの掲載となったと考えられる。

文学以外の分野で日本関連収録点数の大半を占めたのが，④論説・記事等であった。その内訳を表3に示した。そのうち収録点数が最も多い分野はd文化であり，以下h教育，b戦争，jその他，i経済，g倫理が続き，a時事とc歴史が同数であった。

日本文化を紹介する記事は15点である。1-7は日本刀の歴史から製造まで，1-12は仏教の歴史と現状，2-15は結婚とその儀式，2-16は茶の湯の歴史と儀式，3-7は着物と現代の衣生活，3-9は古代から現代の建築，3-22は家庭における女性，4-4は仏教建築，4-8は女性の家庭外労働，6-8は『日本文化史』[22]の概略，7-16は子供の遊び，7-18，8-20

20 「雪女」は『怪談』（1904）に，その他は『日本雑録』（1901）に所収される。

21 たとえば，2-19は野口米次郎（1875-1947）の詩集「ガンジス我を呼ぶ」に収録されたとされるが，原語による原著名は提示されない。なお野口は1935年10月から翌年2月までインド・東南アジアを旅行している。これらの日本文学作品の原著名や出版年は提示されないが，当時のビルマ人の日本語運用能力から考えても，原著は日本語ではなく英語である可能性が高い。これらの作品の入手ルートや選出基準については，大東亜共栄圏の他の国々における日本作品の翻訳紹介状況と併せて考えるべき課題でもある。

22 原著は“JAPAN　HER CULTURAL DEVELOPMENT”嘉治隆一著1939年国際文化振興会出版であり，1943年にビルマ語版が出版された。

は切腹の作法と歴史，10-11 は精神生活，11-8 は盆の行事を紹介する。

表3　日本関係④論説・記事内訳

	a 時事	b 戦争	c 歴史	d 文化	e 国語	f 文学	g 倫理	h 教育	i 経済	j その他	計
1号	0	2	0	2	0	1	0	0	1	1	7
2号	0	0	0	2	0	0	1	2	0	1	5
3号	0	1	0	3	0	0	0	0	0	0	4
4号	0	1	0	2	0	0	0	0	0	0	3
5号	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	2
6号	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	2
7号	0	0	0	2	0	1	0	0	0	0	3
8号	0	0	0	1	0	0	0	0	2	0	3
9号	0	0	1	0	0	0	1	2	0	0	4
10号	1	0	0	1	0	0	0	1	0	2	5
11号	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	2
計	1	5	1	15	0	3	2	7	3	4	41

教育関係の記事は７点ある。2-10 は日本の初等教育から高等教育まで，2-26 は日本占領下のフィリピンの小学生の体育授業風景，5-20 は学齢期以前の日本の子供の教育，6-15 は日本での留学生教育，9-8 は日本の子供の軍隊式遊戯，9-15 は日本の母子福祉と教育を紹介する。10-15 は日本留学中のビルマ人の手記である。

戦争関係の記事は５点ある。1-17 はシンガポール，マレー，ビルマの緒戦の状況，1-22 は緒戦の英国三大戦艦撃沈，3-4 はオランダ帝国の成立から日本軍のジャワ占領に伴う同帝国の崩壊を紹介する。4-12 は降伏英国司令官の手記，11-12 は日本兵の手記と見られる[23]。

その他４点は，1-11 がナカハラ彗星の発見，2-18 が猫に関する言い伝え，10-14 がドイツ人による日本人論の紹介である。10-18 は白色人種によるビルマ支配と日本軍による占領との比較である。

経済に関する３点の記事は，1-14 が玩具産業の発展，8-3 が三井財閥の経営方針，8-7 が同盟通信の設立と発展を紹介する。

倫理に関する２点の記事は，日本の発展を目先の利益を犠牲にした長期展望主義にあると説く 2-24，9-14 である。

23　記事の多くは出典が明示されないが，2-15 は米国の女性作家による ‘Interview Japan’ に依拠したとされ，1-22 は大阪毎日の南方戦線従軍記者 Junzaburo Nakayama の記事，3-4 は Japan Times の 1943 年３月 12 日の記事，4-12 は 1942 年２月 15 日シンガポールで降伏したマレー軍総司令官パーシバル中将の「敗戦回顧」を載せた同盟通信日曜版からの転載，11-12 は Risuke Katsumata の ‘Tears and Soldier’ とされる。原著を確認する必要がある。

時事は，10-5 が新設された大東亜関係省庁の紹介である。歴史は，9-7 が明治天皇の五箇条のご誓文の紹介である。

日本関連論説・記事は，おおむね，日本の経済的発展や緒戦における日本の軍事的優位を紹介しながら，それらを支えてきた精神的背景として日本文化と教育の力を強調することに重点が置かれた。その意味において『作家』は，「日本文化紹介」という役割を適度に果たしたといえよう。

次に，以下の 5 で，雑誌全体の六分の五を占めたビルマ関連記事を，作家協会関連，文学関連，時事と戦争関連，それ以外に分け，それらの特徴を見ていくことにする。

5．ビルマ人のための『作家』

5．1　作家協会関連記事

作家協会編集部[24] は，50 点にのぼる協会に関連する記事によって様々な発信を行った。第一に，『作家』創刊に関する言及がある。1-2 によれば，創刊の目的は協会設立の目的に同じであり，特に述べるには及ばない[25] とする。また，12 月 8 日を創刊日としたのは，それが日本と英米の開戦記念日であり，それに続いて東条首相が大東亜共栄圏の新時代建設にビルマを独立国として参加させることを約束したためだとする。創刊が決定されたのが 1942 年 11 月 15 日であり，準備期間が短かったため，写真や用紙やインクの入手が困難であったことも強調される。

第二にうかがえるのは，編集方針である。編集方針についての直接の言明があるわけではない。ただ, 8-2 で, 恋愛物や読者の人気を呼ぶ読み物の掲載を求める一会員にたいして，『作家』の出版は営利目的ではなく，読者に対してビルマ文化とビルマ文学の真髄を知らしめることを重視している旨，編集部から回答がある。11-14 では，会員からビルマ的な内容の記事を大々的に掲載するようにとの提案があった旨の報告もある。これらから，編集の重点が，読者のビルマ人としての自覚を促進することに置かれていたことがうかがえる。

第三に，会員に対して作家協会の活動上の必要事項が伝達される。1-6，1-28，2-1，2-2，5-31，6-2，7-3，8-2，9-22，9-23，10-3，11-3，11-14 で，協会設立目的，事業内容，

24　1-2 では，雑誌執行部は 1 トゥリヤ・ウー・テインマウン（協会会長），2 ジャーネージョー・ウー・チッマウン（協会執行委員），3 ミョマ・マウン（同），4 トーカ・タードゥン（同），5 ゼーヤ（ウー・ヨー）の 5 名とされる。5-31 では，3 と 4 の作家に替わり，ミョマ・サヤー・ヘインとウー・マウンマウンが入っている。6 号表紙では，この 5 名を執行部として，ウー・テインマウンを雑誌運営責任者，ウー・チッマウンを雑誌編集責任者とし，副編集者にウー・テイン（ザワナ）が入る。6 号表紙から 9 号表紙まで執行部名簿の記載がある。11-14 では，ウー・チッマウンが余儀なき事情により協会執行委員を辞任したため，雑誌編集責任者にゼーヤが就任した旨報告される。

25　［南田 2010: 114］で協会の主要目的は，1. ビルマ国民に有用な外国文学を翻訳することによって，ビルマ文学の領域を広げ，新国家建設を支援する，　2. 外国作家との交流の機会獲得に努め，ビルマ作家の水準の向上を図る，　3. 作家が経済的利益を享受する協会独自の文学関係事業を計画することとされる。「週刊誌月刊誌の発行」は 3 の事業の一つとされるが，目的を「特に述べるには及ばない」とされるのは，重複を避けての表現なのか，作家協会側に別の意図があるのか，文面からはうかがえない。

活動報告，執行委員会報告などが記されている。たとえば，1-6，2-2では広告掲載募集[26]がなされる。会費については，1-28では，入会金を1チャットとし，月会費年会費は定めず浄財を求めるとされる。しかし，9-22では入会金を5チャットに，年会費を10チャットに，終身会費を100チャットに定める旨の報告がある。10-4，11-15には，会費納入者161名の名簿が掲載される。6-2では，作家協会名称を「独立」ビルマの国名 'Bama' に合わせて変更することの是非が論議され，従来どおり 'Myanmar' を用いる[27]と決定された旨報告される。11-14では，『作家』発行が月700チャットの損失を出し，継続の是非が論議され，価格3チャット（300銭）への値上げが決定された旨の報告がある。

小説随筆執筆要綱については，1-25で申請用紙10枚以内の原稿を提出し，採用の場合午前8時から11時の間に事務所で責任編集者と面談のこと，2-25で新奇な創造力を駆使した小説10枚随筆5枚以内を求める旨，また挿絵の都合上太陽暦毎月10日までに送付のことと記される。3-28，4-16，5-22，6-19，7-31にも同様の記事が掲載される。3-31末尾には，戦争体験を送付すれば適宜掲載する旨，6-12では原稿応募者は非会員でも可とする旨，9-2では用紙不足で物価が急騰中で，極力短く趣のある文の投稿を求める旨記載される。これらは，物価急騰と用紙不足の中での編集部の呻吟を伝えるものとなった。

会員向け伝達では，ほかに，8-21で年次大会と授賞式の日程を知らせ，10-2で4ヶ月に一度の全国大会を召集している。6-27，6-30，7-23，8-22，9-16では，転居者へ住所変更の届け出を求めている。

『作家』の購読については，2-12，3-6で，6ヶ月分6チャットか，または12ヶ月分11チャットの前納を求めている。支払い方法については，6-6，7-25では，発行後7日以内に直接事務所へ来訪の上支払うよう，8-5では前金を書留か直接支払うよう求められる。

4-28，5-27，7-5では，協会事業としてのビルマ語国語辞典編纂[28]支援の意義が，寄付者名簿とともに掲載される。

なお，3号と4号を除くすべての号に掲載される協会の活動報告の頁には，羽根ペンを持つ手を輪で囲んだ協会ロゴマークが付される。3-33では銀製の協会バッジ製作につき，色づけの技術者を求めている。

---

26 広告料は，一般は1頁40チャット，半頁25チャット，四分の一頁15チャット，八分の一頁10チャットとされ，二色刷りは二倍とされた。裏表紙は1頁60チャットで，二色刷りは100チャット，三色刷りは200チャットとされた。また，会員登録を済ませた事業家には特別割引があるとされた。

27 'Bama' 'Myanmar' は，ともに多数派民族ビルマ族を称する同義語で，1948年の独立後も，国家の呼称としても併用されてきた。前者は口語的，後者は文語的ともされ，作家協会は1943年の「独立」後も文語的呼称を継続使用した。これによっても，1989年に国名表記を Myanmar に統一した軍事政権の，'Bama' が一民族名で 'Myanmar' が全民族を指すという根拠は信憑性に欠けることになる。「独立」後，協会名称は 'Myanmar Pye Saye Hsaya Athin' から 'Myanmar Naingngan Saye Hsaya Athin' となった。'Pye' も 'Naingngan' も国家を意味する。名称決定は，作家教会内で4回の会議を経たものとされるが，議論の内容には触れられていない。

28 ［太田: 256-257］によれば，1943年3月14日設立されたビルマ学芸院（Pyinnya Dagun Athin ビルマ語の直訳は知識の幟協会）の事業として，国語辞典と百科全書の編集事業が選定された。国語辞典部はウー・ウン（ミントゥウン）が主宰した。1944年1月からヤンゴン南のクンジャンゴンで作業がなされ，1945年3月には半分まで修了したが，4月5月の爆撃により中断した。

前述のように，協会関連記事は，表２の『作家』の分野別収録点数の中で，比較的多数の部分を占めた。これらの記事は，『作家』発行の協会としての目的や編集方針を伝えるのみならず，協会の活動上の必要事項を会員に伝えるものが多数を占めた。それは『作家』が，戦時下における生命の危険と生活破壊の中で，読者の中心をなす会員作家たちを組織する機関誌としての役割を果たすべく健闘したことを物語る。それはビルマ文学史上においても，用紙不足と物価高騰の中で呻吟する協会の活動を伝える記録としての価値を持つものとなった。

５．２　ビルマ文学関連記事

筆者がすでに明らかにしたとおり［南田 2010: 125–128］，『作家』掲載短編小説[29]は，第一にビルマ将兵という新たな人物像を読者に提供し，ビルマ軍の密かなプロパガンダ的役割を果たした。第二に，恋愛物，冒険物，ミステリー物などを提供して娯楽的役割も果たした。第三に，単行本長編より顕著に啓蒙的役割・風刺的役割を果した。ここではそれ以外の②童話・民話，及び③詩歌に，「表４ビルマ関連④論説・記事内訳」のｆ文学関係の12点も加えて，その特徴を見ていくこととする。

②童話・民話７点は，すべて「お話してあげよう」のタイトルが付され，ミントゥウン（1909–2004）の作である。2–17，3–29，4–19，5–26，6–29，7–29は，アンデルセンの「白鳥の王子」に類似した「アカツクシガモ11兄弟」の連載である。これと併行して，ビルマ民話とされる「こだまと睡蓮」が2–17に，「娘菓子売り若者粉挽く」が3–29に，「賢犬ニーパー」が4–19に，「賢い馬鹿犬」が6–29に，「鶏と狐」が7–29に，「ウサギと狐」が9–5に収められる。ほかに，9–5には現代を舞台とする「魔法瓶」も収められる[30]。これらのうち「賢犬ニーパー」から「ウサギと狐」までの４編は，いずれも弱者が知恵をめぐらせて狡猾な強者の鼻を明かす物語であり，日本占領期の作品としてはきわめて寓意的なものである。

一方詩歌24点のうち19点は，プロパガンダ色が鮮明である。2–6は軍事訓練の苦痛を克服する「ビルマ精神」を謳い，2–7は戦争と国家のための愛の終焉を謳う。2–23はアジア青年連盟より寄稿された連盟歌であり，「ビルマの新時代」に向け青年に決起を促す。4–24は，敵機来襲の際の避難を促す。5–3は，白色人種の駆逐に命をかける黄色人種の尊さを称える。5–8は，女児に日本語学習を，男児に戦争ごっこを促す。5–9は戦争勝利を求め翻るビルマの旗を，5–15は指導者アウンサン（1915–47）[31]を称える。7–1，7–2は，安全とビルマの発展を祈願する。7–7は王の威徳を称えながら英米駆逐を願う。9–11はビ

29　［南田 2010a: 125］では，『作家』掲載ビルマ短編小説を合計44点としたが，2–11と3–10を加えて46点としたい。2–11は4–6と同じ作家による説教師の独白を描いた同名の作品で，風刺的役割の項に，3–10は戦前の市井の出来事を描いたもので，娯楽的役割の項に分類して加えたい。

30　『作家』収録の童話について，［Oung Kyaw 1974: 28］に作品名が列挙される。ただし，6号，7号，9号に収録された童話の作品名は挙げられない。

31　アウンサンは，5号発行当時の1943年5月にはビルマ防衛軍最高司令官であった。8月の「独立」以後ビルマ国軍最高司令官として政府に入閣し，国防大臣となった。注9も参照されたい。

ルマ人の活躍による英米殲滅を願う。9-13 は国家への献身を称える。10-6 は史的遺恨を晴らすことを願う。9-21, 10-16 は, 娘から若者へ勇敢に戦うよう激励する。10-21 は「敵」の殲滅を促す。11-17 は王朝時代の詩人の活躍を称え，11-18 は「独立」称える。

これらは主として,「敵」である連合軍を打倒するための勇猛な「ビルマ精神」の育成, 戦いの主体たるビルマ軍の発展,「独立」の尊さなどを強調する，ビルマ軍のためのプロパガンダであるといえよう。ただ，日本語学習を促す 5-8 のみは，日本軍のプロパガンダであることは否めず，戦後もその種の評価がなされている[32]。一方王朝時代の詩人の作品を再録した 7-12，消えた妻の捜索を描く 7-28，愛を謳う 9-9，結婚を祝う 9-18，花を愛でる 10-8 は，プロパガンダ色が鮮明ではない。

文学関係の論説・記事等は，1-23，1-27 が新刊書評，7-11，8-16，9-6 がビルマ古典文学の解説，5-25，8-11 が古典から現代までのビルマ歌謡・芸能の概説である。1-21，2-22 は，時局に恋歌を歌う権利があるかについて論争するものである。3-30，5-16 は，ビルマ作家の置かれた苦しい状況を語る。11-1 は,「文学者の日」[33] 制定の意義を説く。これら古典文学や伝統芸能の紹介は，ビルマ人読者に対する啓蒙的役割を担うものであったといえよう。

文学関係の掲載記事には，第一に民話における寓意性，第二に詩歌における「国家」への献身，戦争勝利，ビルマ軍礼賛などの明白なプロパガンダ性，第三に論説における文学的伝統の紹介による啓蒙が, 主な特徴として見られた。前述の短編小説の役割に照らせば, とりわけ詩歌においてより顕著なプロパガンダ的役割が果たされたといえよう。

次に，表４におけるビルマ関連④論説・記事を，時事・戦争関連記事とその他の記事に分けて，そのうち前者の特徴を以下で見ていくこととする。

５．３　時事・戦争関連記事

表４のビルマ関連④論説・記事の内訳においては，a 時事が最も多く，g 倫理，b 戦争と c 歴史，d 文化，f 文学，i 経済，h 教育，e 国語と j その他が，それに続く。

27 点からなる時事の特徴は，第一に，それがビルマ軍自身から，あるいはそれを支援する立場からの発信である点にある。1-1 のビルマ防衛軍による新ビルマ国への宣言は,「ニッポン」との協力に言及しながら，真の独立と防衛には手段を選ばないとして，軍事と行政の分離を説き，1-4 にビルマ防衛軍公募要綱を示す[34]。3-1 は「三十人の同志」の紹介と「独立」へ貢献を述べ，5-2 は戦死した三十人の同志の一人を軍神として称える。

32 ［Tin Moe 1983: 203-204］で指摘され,『作家』掲載詩として 5-15 が挙げられる。なお『作家』掲載詩歌に関して,［Min Hla 1973: 282-283］では，具体的なタイトルはないが，簡単な内容の紹介がある。［Hla Tun 2004: 1-7］でも，1-20 とビルマ詩歌 13 編の紹介がある。［Myint Than 1983: 85-88］では，1-20，2-6，5-15 の作品が引用され，2-7，4-24，5-8，5-9 の作品の題名が列挙されたうえで，日本占領期は印刷された詩歌よりむしろ巷において歌われる歌謡が多く存在したと述べられる。

33 注４を参照されたい。

34 ［Win The 2001: 118-125］では，作家協会の活動を『作家』1 号と 2 号に依拠して叙述した上で，1-1 をビルマ防衛軍関係記事を紹介している。

7–9 では，「ヤスクニ」のような殉難者合祀施設が必要と説く。

表4　ビルマ関連④論説・記事内訳

	a 時事	b 戦争	c 歴史	d 文化	e 国語	f 文学	g 倫理	h 教育	i 経済	j その他	計
1号	3	1	2	0	0	3	2	0	0	0	11
2号	0	2	2	1	1	1	0	1	0	1	9
3号	2	2	2	1	1	2	4	1	1	0	16
4号	2	4	1	1	0	0	5	0	0	0	13
5号	4	2	2	1	0	1	1	2	1	0	14
6号	2	3	0	0	2	0	3	1	2	1	14
7号	5	0	0	0	0	1	3	1	2	0	12
8号	3	0	2	2	0	2	1	1	1	0	12
9号	3	0	1	0	0	1	0	1	0	0	6
10号	2	1	2	1	0	0	0	0	1	1	8
11号	1	0	1	0	1	1	1	0	1	0	6
計	27	15	15	7	5	12	20	8	9	3	121

第二の特徴は，ビルマ「独立」獲得とそれを契機とする，更なる「国家再建」を促す点にある。1–3 は，1942 年 1 月 2 日の日本の議会における東条首相の演説によるビルマ「独立」に言及する。3–24 は，1943 年 1 月 28 日のビルマへの「独立」付与決定を告げる。4–1 は「独立」付与を受けて両国の友好と同盟のための機関設立を，4–2 は「独立」宣言の日に博物館設立を提言する。「独立」を前にした 5–21 では，政府，ビルマ軍，泰緬鉄道建設など各方面における発展を，7–17 は全国民の任務の自覚を求める。8–1 では，「独立」が終着点ではなく，新しく国家再建をなすべきだと説く。8–24 には「独立宣言書」が，9–1 にはビルマ国家基本法[35] が掲載される。10–22 は「独立」を得たからには，「民族・言語・宗教」[36] を発展させるべく努力すべきだと説く。

第三の特徴は，全国民の国家建設や戦争への参加・協力を促す点にある。作家たちに対して，5–1 はペンをとって国家建設に協力することの重要性と，新時代建設における日本との連携の「効果」を説く。10–1 は，作家の戦争協力を促す。5–19 は，パテインの僧院戒壇設置を新時代新秩序の好例ととらえる。6–14 では公務員訓練所[37] 入所体験記，6–25,

35　1943 年 8 月 1 日，独立準備委員会委員を中軸とする建国会議が，バモーを国家代表に選出し，ビルマ独立宣言書と国家基本法を可決し，国家代表が組閣と枢密院編成を行った［太田 1967: 365–370］。ビルマ軍は防衛軍から国軍となったが，軍事秘密協定によって日本軍の指揮と監視は継続された。

36　「民族・言語・宗教」は 1920 年代の民族運動のスローガンであった。1930 年代後半からの左翼潮流の台頭によって鳴りを潜めていたが，この時代にいったん再生した。現軍事政権によってもしばしば使用される。［南田 2009: 114–115］

37　1942 年 12 月，ラングーンに開設された民防衛訓練所（National Service Training Camp）と考えられる。1943 年まで 7 回にわたり，男子 653 名，女子 71 名を訓練した［太田 1967: 253］。

7-4 では奉仕隊[38] の事業概要が記される。7-26 は農村における奉仕隊の必要性を説く。8-23 は，ビルマ利き腕隊（泰緬鉄道建設奉仕隊または汗の兵隊）の結成を伝え，応募を呼びかける。7-30 は民族間通婚も含めた友好を，9-4 はチン族[39] との友好と，その居住地域における仏教布教の必要性を説く。9-10 は人口増加策を提案する。11-13 は作家協会主催の作文コンテスト受賞作[40] で，大東亜共栄圏建設の必要性と戦争の勝利を訴える。

戦争関係の 15 点では，第一に，1-13，2-13，2-29，3-25，3-31，4-5，4-18，5-13 におけるような，各地から寄せられた生々しい戦闘遭遇体験や，10-13 のような戦地から送られたビルマ軍将兵の手記がある。第二に，6-5，6-24，6-26 におけるように，戦闘そのものではないが戦時の経験や見聞の手記がある。第三に，「三十人の同志」とビルマ軍に関するものがある。4-7 は，「70 年の英国支配を結成 7 ヶ月にしてくつがえしたビルマ独立軍」結成の経緯を叙述する。4-20 は同軍幹部へのインタビュー記録である。5-14 は，緒戦で「秘密のベールに包まれていた」ビルマ独立軍についての初報道の転載である[41]。

時事と戦争関係の掲載記事は，日本軍と連携したビルマ軍への参加・協力，国家建設への参加を促す強いプロパガンダ的役割を担った。また，日本占領下における作家協会機関誌のこれらの記事は，作家たちの対日協力の貴重な記録ともなったといえる。

5．4　その他の記事

歴史関係・文化関係記事は，ビルマ人としての過去と現在を確認させるものである。歴史関係の 15 点は，第一に王朝時代のモン族[42] の英雄の活躍を描く 1-9，3-2 がある。第二にビルマ族の王朝時代[43] に関連して，外交の意味を説く 1-10，10-7 や，労働者について定義する 9-17，仏典結集について述べる 10-17，枢密官の伝記である 11-11 がある。第三に，英国の侵略から「独立」までを概観する 2-5，5-28 がある。第四に，ビルマ族の出自を釈迦族とする通説に対して，インド起源を説く 2-14，3-27，4-22，5-6，8-9，8-17 がある。

文化関係 8 点は，2-4 が時局に応じた女性の服装改革を，8-12，10-9 がビルマの人名表記の改革を提案する。3-23 は伴侶を偲んで建立されたパゴダを，4-27 は王朝時代から存在したというビルマの刀剣思想を，8-6 は王朝時代の図書館を紹介する。

38　1942 年 12 月設置の民防衛奉仕隊（Wundan Apwe）で，防衛上の労力奉仕，防諜，警護，協力，戦力培養，奉仕節約，人心安定を目的とした［太田 1967: 252］。

39　アメリカ軍が「野蛮」な原住民を兵士として活用したように，ビルマ西北部山岳地帯に居住する「野蛮なチン族」を活用することを提言する。当時のビルマ作家の対少数民族観がうかがえる。

40　「ビルマ国民の大東亜戦争参加精神の昂揚」をテーマとして，1943 年 2 月に実施が決定された。授与式は 1943 年 9 月 3 日に実施され，一位には 200 チャットが授与された［南田 2010: 114］。

41　5-14 は 1942 年 3 月 30 日 'Japan Times' からの転載とされ，4-7 とともに［Hla 1968: Vol. 3, 188-195］にも転載される。

42　11 世紀に南部のモン族を制覇したビルマ族がモン族の優れた仏教文化をとりいれた。その後も両民族との間には戦闘がしばしば生じた。これらの記事はビルマ族と戦いで有能さを発揮したモン族武将の紹介である。

43　11 世紀以来三度にわたって統一王朝を打ち立てたビルマ族の最後の王朝コンバウン朝（1752-1885）の記述が大半である。

倫理関係20点は，爆撃や生活破壊の中で生きる知恵を読者に授けるものである。それらは，発想の転換を促す1-16，3-12，4-11，6-7，8-10，恐怖の克服を説く3-8，3-11，4-9，4-21，カルマの重視を説く6-17，7-13，婦徳を強調する3-20，4-26，6-11，ビルマ人の怠惰，狡猾，不団結の改善を説く5-4，愛の意味を解釈する4-23，倫理の向上を説く7-14，11-5，野蛮でなく開明的であれと説く1-8，親の恩を説く7-19などである。

国語関係である2-3，3-17，6-3，6-20，11-2の5点は，ビルマ語国語辞典編纂の意義，編纂への提言などである。

教育関係8点は，図書館建設を提言する2-28，授業料無料で優秀者を留学させる選抜学校を紹介する5-12，1930年代末の学校制度を概観する6-16，国家建設における人材育成の協力体制を提言する3-13，5-5，7-22，8-25，9-20などである。

経済関係9点は，開明すべき対象を農村として農業改革を提案する5-17，6-10，7-24，8-15，10-19や，政治的独立から経済的独立を目指すことを主張する6-1や，輸入葉タバコ使用に関して提言する3-19や，協同組合設立を提言する7-6や，世界の銀行の歴史を紹介する11-16がある。

いずれにも分類できなかったその他の分野jは，戦火が及ぶ直前に布教でヤカイン[44]地方へ出かけた紀行2-21や，殺人犯を突き止める事例6-13[45]や，笑い話を集めた10-10である。

これらその他の記事は，ビルマの過去と現在を認識させ，戦時下のビルマ人に生きる勇気と知恵を授け，さまざまな提言によって，ビルマ人を啓蒙する役割を担ったと考えられる。

なお，O④jに分類した2点の海外記事であるが，6-21はアメリカの離婚に関する笑い話で，9-19は息子に厳格すぎた父の反省が語られる[46]。

6．おわりに

本稿は，ビルマ国内では十分な言及がなされてこなかった日本占領期のビルマ文学の文学史的位置づけを明らかにする作業の一環として，作家協会機関誌『作家』の創刊号から11号までを取り上げ，その外形的特徴と掲載記事300点の特徴から，同誌の果たした役割について考えるものであった。

『作家』には，すでに創刊時より「民衆の啓発」と「日本文化紹介」という二つの役割が与えられていた。『作家』編集部は，記事の6分の一を占める日本関連記事によって後者の役割を適度に果たした。さらに編集部は，残る6分の五を占めるビルマ関連記事によって，前者の役割を最大限に活用したといえよう。すなわち，「民衆の啓発」という名目

44　ヤカイン（アラカン）地方はベンガル湾沿いのビルマ西端にあり，日本軍侵入に伴い陸路インドへ避難する人々が殺到した。

45　同じタイトルのもとでその2とされる8-8は，編集者によって小説に分類されている。

46　6-21の出典は明示されず，9-19は20年前の“People Home Journal”掲載記事の転載とする。これらが掲載された意味合いについては検討の余地がある。

のもとで，『作家』は，第一にビルマ人としての誇りや自覚を促す啓蒙的役割を果たした。第二に『作家』は，日本軍のプロパガンダを最小限に抑え，ビルマ軍への協力によりビルマの真の独立獲得を目指すという，ビルマ軍のプロパガンダ的役割を果たした。

これら啓蒙的役割とビルマ軍のプロパガンダ的役割は，質的量的に濃淡があるものの，すでに明らかにしてきた小説を中心とする文学作品の果たした役割の枠組みを超えるものではなかった。小説を中心とする文学作品からはうかがえなかったが，『作家』の掲載記事からうかがえたいまひとつの役割としては，日本占領下の作家集団を組織し，協会の活動を強化するための機関誌としての情宣的役割があげられる。

そのような『作家』の作家協会機関誌としての情宜的役割に関して，最後に指摘しておきたい点がある。第一に，作家協会とビルマ軍の緊密な関係である。『作家』掲載記事に見られるビルマ軍のプロパガンダからは，単なる作家集団の機関誌としての役割を超えるものがうかがえた。しかし，会長ウー・テインマウン（1898–1966）の以下のような認識は，ビルマ軍への協力が当時の作家協会の基本的立場であったことを物語っている。

「ビルマ防衛軍設立に対して，我が協会は最大限の援助と激励を与える義務がある。作家であるゆえ，戦争に関連した書籍を執筆して激励することが，より効果的だと信じる」[47]

作家協会と，ビルマ軍あるいは「独立」国家ビルマとの緊密な関係は，ビルマ作家の対日協力の証左ともなった。たとえば，泰緬鉄道建設労務者徴募推進記事は，ビルマ人にも多数の犠牲者を出した史実における，ビルマ側の加害者的側面の貴重な証言録としての価値も持つ。たしかに，ビルマ軍の対日協力の「汚点」は，ビルマ正史においては 1945 年 3 月の軍による抗日蜂起の栄光によって不問に付された。しかし，ビルマ国内における『作家』に関する叙述の歯切れの悪さや，日本占領期の資料収集の困難さは，この対日協力の問題の厳正な検証がいまだなされていないことと表裏一体の関係をなすのではあるまいか。

第二に検閲の問題である。『作家』には，ビルマ文学史上悪名高き日本占領期の検閲の痕跡も見出せる[48]。たとえば，8–23 の泰緬鉄道労務者募集記事「ビルマ利き腕部隊結成中！ビルマ人，ビルマ経済，ビルマ防衛，ビルマ文化を愛する者は，今日入隊されよ」では，4 箇所が黒塗りされる。うち 3 箇所は，前後の文脈から地名であることがうかがえ，軍事機密保持のための黒塗りであると推測される。

ただし，すでに明らかにしたように，この時期の検閲において，日本人が直接ビルマ語を詳細に吟味した痕跡はうかがえない。検閲には，ビルマ軍あるいはビルマ人が大幅に関与した可能性が大きい[49]。したがって検閲による黙認の痕跡も，小説を中心と文学作品の中には見出せた。そこには，作家たちのひそかな抗日の意識が垣間見えた［南田 2010a: 123–124，129–130］。『作家』誌面の小説以外の記事でも，その痕跡は見出せる。たとえば，

47 「三十人の同志」の伝記［Myadaung Nyo 1943］の 1943 年 1 月 27 日付けの序文である。

48 大幅な削除があった 10–12 の小説については，［南田 2010a: 126］を参照されたい。

49 ［南田 2010a: 128–132］を参照されたい。［Than Nyunt 2004: 14］でも『作家』編集部に持ち込まれた原稿を反日的だとして責任編集者がボツにしたことに言及される。

作家ペンネームとその由来を列挙する 3-15 では，この時点でアメリカにいたニョウミャ（1914-85）や，インドに亡命したテインペー（1914-78）[50] の名までが掲載されている。ここからは,『作家』編集部が, 連合軍との協力者たちの名を紛れ込ませたこの記事を黙認し，さらに検閲側もそれを削除しなかったことがうかがえる。そこには，当時の執筆・編集・出版ならびに検閲にかかわったビルマ人たちの，対日協力への密かな抵抗姿勢もうかがえるのではあるまいか。

検閲の問題と関連して,『作家』執筆者のペンネームについてもふれておきたい。『作家』執筆者は 92 名に上る。しかし, 表 5 において # で示したように, 現時点で 26 名の実在（生年，本名など）が未確認[51] である。一方，11-14 では，一会員から別名使用の推奨が提案された旨報告がある。ゆえに，未確認執筆者の中でも執筆の頻度が多い者は，実在作家が『作家』執筆用に新たな別名を創出して使用した可能性が考えられる[52]。また，無署名記事は，基本的には編集部の執筆と考えられる。表 5 において，＊は実在作家で別名使用が明白となった者である。こうした別名の使用は，日本軍の検閲対策と考えられる一方，対日協力の証拠隠匿の意図が存在した可能性も考えられる。未確認原著とともに未確認筆者の確認作業は，継続すべき課題である。

なお表 5 に大幅な紙面を割いたため，ここで扱えなかったその他の課題[53] についても，稿を改めねばならない。

表5『作家』掲載記事一覧

B: ビルマ　J: 日本　O: その他の海外　①小説　②童話・民話・説話等　③詩歌　④記事・論説等　⑤協会関連　a: 時事　b: 戦争　c: 歴史　d: 文化　e: 国語　f: 文学　g: 倫理　h: 教育　i: 経済　j：その他　無：無表示　#：未確認筆者　____：女性名　＊：実在作家による別名又は無署名
国名はビルマ語原文で使い分けられるため，便宜上 'Bama' を「ビルマ」，'Myanmar' を「ミャンマー」，'Nippon' を「ニッポン」，'Japan' を「日本」と表記した。

50　ニョウミャは留学中に大戦を迎え，米国政府ビルマ関係アドバイザー，ならびにインドのレドにあった対ビルマ情報戦責任者を務めた。テインペーは日本軍から手配されてインドに逃れ，デリーの英国情報省極東ビューロー（FEB）でビルマ向け抗日放送や情宣ビラ作製に従事し，その後謀略機関 136 部隊と協力して，ビルマから脱出した青年たちにカルカッタで抗日教育を行い，国内に送り込んだ。1943 年 8 月にビルマ軍と連絡を通じ，抗日統一戦線結成に力を与えた。［南田 1994］を参照されたい。

51　実在者の確認には 10-4，11-15 の会費納入者名簿，［Pyankyaye hnit Pyidhu Hsehasanye Uzihtana Sati Aphwe 2003］［Soe Myint: 2005］などの作家辞典，［Pyi Soung 2009］の回想録を使用した。

52　別名使用作家については［南田 2010a: 125, 127-128］を参照されたい。なお同著で別名を疑った 5-10，8-19 の作者は会費納入者名簿で実在が確認された。

53　たとえば,「日本精神」をビルマ独立の精神的武器に転用した作家としてミンスエーが有名であるが［南田 2003 b］，その他の作家の著作における「日本精神」受容の有無を検証する作業が必要であろうし，記事に見る非ビルマ族の扱いも検討の余地がある。さらに女性執筆者が少なく男性が女性名を騙る問題，表紙の女性表象に関する玩弄物視の問題，婦徳強調記事の問題も検討の余地がある。表紙の女性表象に関しては［南田 2010b: 51］も参照されたい。

【1 号】

	題　目	分　野	(写真・図 点数)	著者名	頁
1	ビルマ国防衛軍	B④a	(写真 1)	無	特別付録　無
2	『作家』	B⑤		無	p. 2
3	ミャンマー国と独立	B④a	(写真 1)	無	p. 3
4	ビルマ防衛軍入隊募集	B④a		無	p. 4
5	二種類の妻	B①	(図 1)	アウントゥー	p. 5
6	広告掲載希望者へ	B⑤		責任編集者	p. 16
7	ニッポン刀剣思想	J④d	(写真 2 図 1)	ターガヤ・ガ・ソウ	p. 17
8	上品であること	B④g		ハンダーワディー・ウー・バイン	p. 23
9	密偵勇士エームンダヤー	B④c		ミャダウンイン #	p. 25
10	ミャンマー王の使節と米国	B④c		ティーハ	p. 28
11	ひとつの星	J④j		無	p. 30
12	日本の仏教	J④d	(写真 2)	マーガ	p. 31
13	中国兵による虐待	B④b		シュエーウダウン	p. 35
14	世界を制覇する玩具産業	J④i	(写真 1)	エインダーヌエー	p. 44
15	時の応報	B①		ティーリマウン	p. 45
16	新しい考え	B④g		ダゴン・ナッシン	p. 48
17	大東亜戦争緒戦６カ月の戦果	J④b	(写真 1)	ミョマ・マウン	p. 50
18	『作家』	B⑤		責任編集者	p. 52
19	アウンマウン	B①		ティンカー	p. 53
20	ニッポン古典詩	J④f		ゼーヤ	p. 57
21	恋慕の魔法	B④f		ミントゥウン	p. 59
22	プリンスオブウエールズの最期	J④b	(写真 1)	無	p. 61
23	『おじさんが話そう』	B④f		ミャダウンニョウ	p. 68
24	大久保村の居候犬	J①		ゾーヂー	p. 69
25	小説論説募集	B⑤		無	p. 71
26	お尋ね者	B①		サヤー・ヘイン	p. 73
27	新刊書など	B④f		ティーリマウン	p. 80
28	協会ニュース	B⑤	(図 1)	無	p. 81

広告：次号掲載記事広告 p. 49，59，83，書籍 p. 79，裏表紙，カレンダー p. 24，理髪 p. 68，印刷 p. 60，化粧品 p. 72，食品 p. 82，葉巻 p. 4，生地 p. 83，

【2 号】

	題　目	分　野	(写真・図 点数)	著者名	頁
1	協会規約	B⑤	(図 1)	無	p. 1
2	広告掲載希望者へ	B⑤		責任編集者	p. 2
3	ビルマ語辞典の誕生	B④e		無	p. 3
4	新時代のブラウスと女性	B④d	(図 3)	図と文ピーシェイン #	p. 4
5	英国侵略の功罪	B④c		ミョマ・マウン	p. 6
6	剣の戦い	B③		ナッマウ・ボンチョー	p. 9
7	終焉	B③		ナッマウ・ボンチョー	p. 11
8	沙弥僧の問題	B①		マウン・スエーティン	p. 12
9	『作家』	B⑤		責任編集者	p. 16
10	ニッポンにおける教育	J④h	(写真 7)	マウン・トンニャ	p. 17

	題　目	分　野	(写真・図 点数)	著者名	頁
11	説教師	B①		トゥカ	p. 25
12	『作家』購読	B⑤		責任編集者	p. 29
13	チーダウンガンの戦闘	B④b		チーダウンガン・サヤー・セイン #	p. 30
14	ダガウン問題	B④c		マーガ	p. 34
15	日本の結婚式	J④d		マウン・テットウ	p. 37
16	ニッポンの茶の湯	J④d		ミョマ・サヤー・ヘイン	p. 39
17	お話してあげよう	B②	(図３)	ミントゥウン	p. 40
18	猫の短い尻尾	J④j		無	p. 42
19	修行者の言葉	J③		ミャダウンニョウ	p. 42
20	痛い恋人	B①	(図１)	マハースエー	p. 43
21	タウンゴウッ・ルートを越えたとき	B④j	(写真６)	ウー・ウィラカ #	p. 48
22	恋慕の魔法 恋うべきか	B④f		コウ・デーワ	p. 53
23	アジア青年歌	B③		無	p. 55
24	長期的展望主義	J④g		シュエーウダウン	p. 56
25	小説論説募集	B⑤		責任編集者	p. 59
26	フィリピンの生徒たち	J④h	(写真２)	無	p. 60
27	恋人の歌声	B①	(図１)	ミョマ・ボンチュエー	p. 61
28	図書館	B④h	(図１)	ゼーヤ	p. 63
29	ヤンゴン避難時	B④b		アウントゥー	p. 67
30	奇妙な夢	B①		シュエーフミャー	p. 69

広告：書籍・カレンダー p. 16,　化粧品 p. 58

【3号】

	題　目	分　野	(写真・図 点数)	著者名	頁
1	三十人の同志と独立	B④a		無	p. 1
2	イエーティンヤン	B④c		ミャダウンニョウ	p. 2
3	戦時中の執務時間	B⑤		無	p. 3
4	我々の眼前で消滅した大国	J④b		無	p. 4
5	本物の処女	B①		ヤンアウン	p. 5
6	『作家』購読	B⑤		責任編集者	p. 11
7	キモノ	J④d	(写真１)	ミョマ・サヤー・ヘイン	p. 12
8	恥か―恐怖か	B④g		タロンセイン #	p. 13
9	ニッポン建築	J④d	(写真３)	マウン・トンニャ	p. 15
10	インドセンダン樹の又	B①		マーラー	p. 19
11	注意！転べば起きよ	B④g		ダゴン・ナッシン	p. 24
12	ミャンマーの思考	B④g		エインダーヌエー	p. 26
13	二十年の予想	B④h		チョーゾー	p. 26
14	鏡の乙女	J②		テットウ	p. 30
15	ペンネーム	B④f		テッカトウ・ティンヂー	p. 32
16	忘れるべからず	B⑤		無	p. 33
17	ミャンマー語大辞典	B④e		無	p. 34
18	作文コンテスト	B⑤		編集部	p. 35

	題　目	分　野	（写真・図 点数）	著者名	頁
19	新制度	B④ i		ターガヤ・ガ・ソウ	p. 35
20	いかなる夫を迎えるか	B④ g	（図６）	詞ダーライター・サヤー・ミン　絵カートゥン・サヤー・ニーニー	p. 36
21	別れないよ	B①		テイッパン・チョーティン	p. 37
22	子供の母	J④ d	（写真２）	ティーハ	p. 43
23	いとしのパゴダ	B④ d		シュエーペインタウン	p. 47
24	ビルマ独立確定	B④ a		無	p. 48
25	体験	B④ b		ダニャワディー・ターエー #	p. 49
26	国軍	B①		ティンカー	p. 56
27	ダガウンの歴史的問題２	B④ c		マーガ	p. 61
28	小説論説募集	B⑤		無	p. 62
29	お話してあげよう	B②	（図２）	ミントゥウン	p. 63
30	メーミョ・マウン未だ書かずという	B④ f		メーミョ・マウン	p. 67
31	ミャンマー国の戦闘　ピンマナー郡の戦闘	B④ b	（図１）	ミンダー	p. 69
32	編集部回答	B⑤		責任編集者	p. 75
33	求む	B⑤		協会会長	p. 75

広告：次号掲載記事広告 p. 14，書籍 裏表紙，印刷 p. 75

【4 号】

	題　目	分　野	（写真・図 点数）	著者名	頁
1	ニッポン・ミャンマー協議機関の設立を	B④ a		無	p. 1
2	博物館設立を	B④ a		無	p. 1
3	宿坊の人	B①		ムントーター＊	p. 2
4	建立千三百年の法隆寺	J④ d	（写真５図１）	マウン・トンニャ	p. 6
5	ミャンマー国の戦闘　バディーゴンの戦闘	B④ b		アウントゥー	p. 9
6	説教師	B①		トゥカ	p. 15
7	三十人の同志　ＢＩＡの誕生	B④ b		ミャダウンニョウ	p. 19
8	ニッポン女性の努力	J④ d		ミンレッウエー	p. 21
9	一服の抗爆弾薬	B④ g		ヤンアウン	p. 24
10	蜂蜜とＵ字鋼	B①		ダゴン・シュエーフミャー	p. 28
11	この言葉–あの言葉–間違いか	B④ g		ミンダー	p. 35
12	英国のシンガポール明け渡し	J④ b		無	p. 36
13	愛の言葉	B①		タキン・ハントゥン #	p. 37
14	梅津忠兵衛	J②		テッカトウ・マウン・ミョウタン	p. 39
15	これは誰か	B①		イエードゥー #	p. 41
16	小説論説募集	B⑤		責任編集者	p. 44
17	愛したから	B①		ボンチュエー	p. 44
18	爆弾恐るべきか	B④ b		メーミョ・マウン	p. 48

	題　目	分　野	(写真・図 点数)	著者名	頁
19	お話してあげよう	B②	(図２)	ミントゥウン	p. 51
20	三十人の同志タキン・トゥンオウッ	B④b		ミャダウンニョウ	p. 55
21	新たな血が沸き立つとき	B④g		ダゴン・ナッシン	p. 58
22	ダガウン問題	B④c		マーガ	p. 61
23	愛とは何か	B④g		アウントゥー	p. 63
24	敵機襲来の歌	B③		無	p. 64
25	執心　あなたの心に	B①		グエーターイー	p. 65
26	伴侶を選ぶ法	B④g		シュエーウダウン	p. 70
27	ミャダウンニョウ作『ビルマ刀剣思想』要旨	B④d		無	p. 72
28	辞典寄金	B⑤		ビルマ語辞典委員会財政部	p. 80

広告：書籍 裏表紙

【5号】

	題　目	分　野	(写真・図 点数)	著者名	頁
1	作家と新時代	B④a		無	p. 1
2	英霊慰霊祭 三十人の同志ボウ・ソーアウン	B④a		ミャダウンニョウ	p. 2
3	尊き男	B③		ペーアウン＃	p. 4
4	ミャンマー民族と悪習	B④g		シュエーウダウン	p. 5
5	子供達の心理	B④h		チョーゾー	p. 9
6	ダガウン問題	B④c		マーガ	p. 11
7	特別な妻	B①		ヤンアウン	p. 13
8	日本語を習おう／戦闘とは	B③		無	p. 18
9	希求	B③		バトゥンエー・アマラプラ＃	p. 19
10	農民の世界	B①		モーチュン・トーダーガレー	p. 20
11	グラジオラス	B①		イエナンヂャウン・ミョウミン＃	p. 21
12	選抜学校	B④h	(写真４)	テッカトウ・ティンヂー	p. 23
13	モンユワーの戦闘とニッポンの奮闘	B④b		シュエーペインタウン	p. 25
14	独立軍	B④b	(写真１)	無	p. 29
15	ボウ・アウンサン	B③		ペーアウン＃	p. 30
16	作家の妻	B④f		ミョマ・マウン	p. 31
17	ミャンマーの職業	B④i		タキン・ミョウニュン	p. 32
18	尊き兵士	B①		ティンカー	p. 35
19	英国のみが政府となりうるか	B④a		ウー・クマーラ＃	p. 40
20	子供の生活	B④h	(写真１)	無	p. 41
21	前進	B④a		タンヌエー	p. 43
22	小説論説募集	B⑤		責任編集者	p. 45
23	競売	B①		ミョオウッ・マンティン	p. 45
24	この戦略	B①		キンソン＊	p. 48
25	ミャンマーの歌声	B④d		マウン・アーユ＃	p. 53

	題　目	分　野	（写真・図 点数）	著者名	頁
26	お話をしてあげよう	B②	（図１）	ミントゥウン	p. 57
27	ミャンマー語辞典	B⑤		無	p. 59
28	独立史	B④ c		無	p. 61
29	ヨネ・ノグチ	J④ f	（図１）	ミャダウンニョウ	p. 66
30	清算に来られたし	B⑤		作家協会辞典委員会	p. 68
31	執行委員任務分担	B⑤		無	p. 73

広告：書籍 p. 60，p. 72，裏表紙，化粧品 p. 3

【6号】

	題　目	分　野	（写真・図 点数）	著者名	頁
1	ミャンマー人の経済	B④ i		無	p. 1
2	協会ニュース	B⑤	（図１）	無	p. 2
3	言葉言葉	B④ e		ピューウィン #	p. 4
4	気のふれた人	B①		マハースエー	p. 5
5	時代が崩壊したとき	B④ b		アウントゥー	p. 11
6	会員諸君へ	B⑤		ザワナ	p. 15
7	時代と人間	B④ g		サヤー・リン	p. 16
8	日本文化史	J④ d		無	p. 17
9	同志	B①		ダゴン・ミャッレーヌエー	p. 20
10	ミャンマーの職業（その２）	B④ i		タキン・ミョウニュン	p. 24
11	奸計奸計–おお奸計	B④ g		ダゴン・ナッシン	p. 26
12	書き手諸君へ	B⑤		『作家』	p. 28
13	犯罪者の足跡をたどる法	B④ j		シュエーフミャー	p. 29
14	ワの学校	B④ a	（図１）	マウン・バマー #	p. 32
15	ニッポンへ行った留学生たち	J④ h	（写真６）	無	p. 38
16	古きミャンマー国の教育	B④ h		無	p. 40
17	三種混合動物	B④ g		シュエーウダウン	p. 41
18	黄泉の国帰り	J②		マウン・ミョウタン	p. 44
19	小説論説投稿要項	B⑤		編集者	p. 45
20	ビルマ語をビルマ人が理解せず	B④ e		ティンカー	p. 46
21	離婚	O④ j		無	p. 48
22	煙草と兵隊	J①		無	p. 49
23	新刊書	B⑤		無	p. 56
24	恐るべき天然痘治療師	B④ b		イエードゥー #	p. 57
25	ビルマ公僕思想	B④ a		編集者	p. 60
26	偽将校と本物の将校	B④ b		シュエーペインタウン	p. 61
27	協会員諸君へ	B⑤		ザワナ	p. 64
28	町の捕虜《小説》	B①		ボンチュエー	p. 64
29	お話してあげよう	B②	（図２）	ミントゥウン	p. 70
30	会員諸君へ	B⑤		ザワナ	p. 72

広告：書籍 p. 19，裏表紙，化粧品 p. 3，p. 69，飲食品 p. 4

【7号】

	題　目	分　野	(写真・図 点数)	著者名	頁
1	安居入りの祈り	B③		無	表紙
2	我々の安居入りの祈り	B③		無	p. 1
3	第11回月例執行委員会	B⑤		無	p. 1
4	ワなるものは	B④a	(図12)	無	p. 2
5	ミャンマー語辞典寄付金	B⑤		無	p. 4
6	売り手買い手の行為	B④i		ミョマ・マウン	p. 5
7	英米２匹	B③		ミントゥーイエイン＃	p. 6
8	煙草と兵隊　火野葦平紹介	J④f		ウットゥ・イエードゥー＃	p. 9
9	英霊合祀寺院の必要性	B④a		ミャダウンニョウ	p. 10
10	真の愛	B①		マハースエー	p. 13
11	ミャワディー・ミンヂーの愛しの慣習	B④f		ディードウ・ウー・バチョウ	p. 18
12	未刊行防災経文と慈愛の書	B③		無	p. 22
13	人のカルマ	B④g		ミントゥーイエイン＃	p. 23
14	倫理	B④g		ティンカー	p. 26
15	これなのだ	B①		シュエーウダウン	p. 29
16	じゃんけんぽん	J④d	(写真４)	無	p. 33
17	独立と我々の義務	B④a		ウー・マウンマウンピエー	p. 34
18	ハラキリ	J④d		ターガヤ・ガ・ソウ	p. 37
19	父は本物－子も本物であれ	B④g		モーチュン・トーダーガレー	p. 42
20	赤い雌犬	B①		イエードゥー＃	p. 43
21	息子	J①		ミンヌエー	p. 45
22	四角と丸	B④h		ダゴン・シュエーフミャー	p. 47
23	会員諸君へ	B⑤		ザワナ	p. 49
24	馬鍬の台木の主	B④i		タキン・ミョウニュン	p. 49
25	会員諸君へ	B⑤		ザワナ	p. 54
26	奉仕隊活動	B④a		ウー・バキン	p. 55
27	新時代の上ビルマ人	B①		ヤンアウン	p. 58
28	消えた妻をエーヤーワディー川沿いに捜索	B③		タウンドゥィン・ソウ＃	p. 64
29	お話してあげよう	B②	(図２)	ミントゥウン	p. 65
30	真の友好	B④a		ウー・バタン	p. 67
31	小説論説募集	B⑤		ザワナ	p. 68
32	セイタカアワダチソウ	B①		アウントゥー	p. 69

広告：書籍 裏表紙，化粧品 p. 54，雑貨 p. 64，占星術 p. 68

【8号】

	題　目	分　野	(写真・図 点数)	著者名	頁
1	独立の２つの性格	B④a		無	p. 1
2	協会ニュース	B⑤		無	p. 2
3	共存　共存	J④i		ウー・バタン	p. 5

	題　目	分　野	（写真・図 点数）	著者名	頁
4	行き過ぎた親切	B①		マンティン	p. 8
5	会員諸君へ	B⑤		ザワナ	p. 11
6	古代の経庫	B④d		ヤダナーボン・ボウマッス	p. 13
7	同盟通信	J④i		テッカトウ・ティンヂー	p. 16
8	犯罪者の足跡をたどる法　その２	B①		ダゴン・シュエーフミャー	p. 18
9	ダガウン問題	B④c		マーガ	p. 23
10	権利	B④g		ミョマ・サヤー・ヘイン	p. 26
11	ビルマの歌声	B④f		マウン・アーユ＃	p. 27
12	模倣の機熟す	B④d		トゥリヤ・アウンミン	p. 31
13	兵士	J③		ミャダウンタウン＃	p. 32
14	美文	B①		ヤンゴン・バスエー	p. 33
15	綿と木から	B④i		マウン・テイッパン＃	p. 35
16	マ・ミャガレーの愛するすべてを	B④f		ディードウ・ウー・バチョウ	p. 38
17	タガウン問題　最終回	B④c		マーガ	p. 41
18	会員諸君へ	B⑤		ザワナ	p. 43
19	木材伐採人夫	B①		モーチュン・トーダーガレー	p. 44
20	ハラキリ	J④d		ターガヤ・ガ・ソウ	p. 47
21	作家協会年次大会と受賞式	B⑤		ザワナ	p. 48
22	会員諸君へ	B⑤		ザワナ	p. 50
23	ビルマ利き腕隊結成	B④a		無	p. 52
24	独立宣言書	B④a		無	p. 58
25	最もほしい本　人間の育て方	B④h		ティンカー	p. 62

広告：書籍 p. 4，p. 56，p. 64，裏表紙，飲食 p. 30，薬品 p. 56，雑貨 p. 57，占星術 p. 28，歯科 p. 46

【9 号】

	題　目	分　野	（写真・図 点数）	著者名	頁
1	ビルマ国統治法規	B④a		無	p. 1
2	短く趣に満ちる文	B⑤		無	p. 1
3	前進–前進	B①		イエナンヂャウン・ミョウミン＃	p. 5
4	西部チン丘陵利用の機熟す	B④a		アシン・オウッタマーターラ＃	p. 9
5	お話してあげよう	B②	（図２）	ミントゥウン	p. 11
6	フラインテイカウンティンと「ヤムナの水」	B④f		ディードウ・ウー・バチョウ	p. 13
7	忠誠	J④c		ピータン	p. 15
8	ニッポンの子供が遊ぶとき	J④h		テッカトウ・ティンヂー	p. 17
9	あこがれの雨しとしとと	B③		アシン・カーウィヤワースィー・ウー・ニャーナウンタ＃	p. 18

	題　目	分　野	(写真・図 点数)	著者名	頁
10	五千万人口へ	B④a		ダゴン・ナッシン	p. 19
11	人気高いビルマ	B③		シュエーペインタウン	p. 21
12	昔々	B①		マンティン	p. 21
13	新生ビルマ兵士	B③		セッフムレッフムタッイン・チョータウン＃	p. 23
14	ニッポンのように発展したいか	J④g		シュエーウダウン	p. 24
15	ニッポンにおける母子対策	J④h	(写真１)	無	p. 28
16	会員諸君へ	B⑤		ティンカー	p. 29
17	労働者の歴史（要約）	B④c		ミャダウンニョウ	p. 30
18	雨安居明け月（レーヂョウ詩　結婚祝い）	B③		ピエー・セッチャー	p. 33
19	父の過ち	O④j		ピューウィン＃	p. 34
20	誰の過ちか（最も必要な書物からの教訓）	B④h		ティンカー	p. 35
21	戦争詩	B③		メーミョウチッ＃	p. 37
22	ミャンマー国作家協会	B⑤		無	p. 38
23	ミャンマー国作家協会規約	B⑤	(図１)	無	p. 39

広告：飲食 p. 16，仲買・食品 p. 27

【10 号】

	題　目	分　野	(写真・図 点数)	著者名	頁
1	文学と戦争	B④a		無	p. 1
2	ミャンマー国作家協会全国大会	B⑤		無	p. 1
3	協会ニュース要約	B⑤	(図１)	無	p. 2
4	会費納入者	B⑤		無	p. 3
5	東亜関係省の事業	J④a		シュエーダウン・ピャン＃	p. 5
6	ミャンマー独立史詩	B③		ナンマー・ウー・バチー＃	p. 7
7	ミャンマーの使節	B④c		ヤーザウィン・バーマウカ	p. 8
8	豆蔦蘭の重畳歌	B③		ダゴン・ナッシン	p. 17
9	未婚か既婚か	B④d		アウンミン	p. 19
10	冒涜の笑い話	B④j		サカーヂー・テイティン	p. 20
11	さび，わび，勇，義理	J④d		トーガ・タードゥン	p. 24
12	愛国的勲章	B①		ティンカー	p. 28
13	戦場からの手紙	B④b		テッカトウ・マウン・ネーウィン	p. 29
14	わたしの最も愛着するもの	J④j		ピー・キンキン	p. 30
15	遠くからの手紙	J④h		ティンウー＃	p. 31
16	愛の花	B③		キンソン＊	p. 32
17	仏典結集	B④c		ミョマ・マウン	p. 33
18	白人と日本人	J④j		ピー・キンキン	p. 34
19	南京豆	B④i		デッカトウ・フラミョウスエー＃	p. 35

	題　目	分　野	（写真・図 点数）	著者名	頁
20	キンフニンメエ	Ｊ②		テッカトウネー・ナッヌエー	p. 39
21	敵は全民族粉砕せよ	Ｂ③		タドウタウン	p. 39
22	しばし	Ｂ④ａ		ミャカロウ	p. 40

広告：書籍 p. 23,　生地 裏表紙,　仲買 p. 23,　種子 p. 18,　占星術 p. 34,　歯科 p. 21,　化粧品 p. 40,
石鹸 p. 6

【11 号】

	題　目	分　野	（写真・図 点数）	著者名	頁
1	文学者の日	Ｂ④ｆ		無	p. 1
2	散文教授法	Ｂ④ｅ		ミントゥウン	p. 1
3	報告致します	Ｂ⑤		シュエーペインタウン	p. 4
4	忘れないね．．忘れない	Ｂ①		ミンダー	p. 5
5	後悔	Ｂ④ｇ		メーメーセイン＃	p. 10
6	ソーヤテッピン	Ｂ①		無＊	p. 11
7	聴診器のために	Ｂ①		マハースエー	p. 14
8	ニッポンの夏祭り	Ｊ④ｄ		カウィ・マウン	p. 19
9	心	Ｂ①		フニンメー	p. 20
10	一枚の木の葉	Ｂ①		ミンヌエー	p. 21
11	ヨーの枢密官ウー・フラインのペンと刀	Ｂ④ｃ		ダゴン・ナッシン	p. 24
12	兵隊と涙	Ｊ④ｂ		テッカトウ・ティンヂー	p. 27
13	大東亜戦争の特徴	Ｂ④ａ		シュエーチュンティン	p. 29
14	３カ月の協会ニュース	Ｂ⑤	（図１）	無	p. 37
15	会費納入者	Ｂ⑤		無	p. 38
16	銀行史	Ｂ④ｉ		ミョマ・マウン	p. 39
17	ウー・ポンニャの日を祝す	Ｂ③		マーガ	p. 39
18	独立	Ｂ③		ペーアウン＃	p. 40

広告：書籍 p. 18. p. 36,　薬品 p. 15, p. 36,　化粧品 p. 16,　書店表紙

参考文献

（ビルマ語）

Achegan Pyinnya Thinyoe Hnyundan, Thinyoe Matika hnit Kyaungdhoung Saouk Committee, 2008, *Myanmar Thamaing Datthama Tan Grade II*, Pyidaungzu Myanmar Naingngandaw Asoeya Pyinnyaye Wungyi Htana, Naypyitaw.

Aung Maw, 1979, “Ye Kyaw Tawaik”, *Moe Way*, Aug., Yangon, pp. 56–58.

Ba Than, U, UPI, 1978,“ Myanmar Naingngan Dhadinza Thamaing”, *Sanezin Thamaing Sadanmya*,Vol. 1, Sapay Beikman, Yangon, pp. 1–76.

Hla, Ludu, U, 1968a, *Dhadinzamya Pyawpyade Sittwin Bama Pye*,Vol. 1,Kyibwaye Press, Mandalay.

— 1968 b, *Dhadinzamya Pyawpyade Sittwin Bama Pye*, Vol. 3, Kyibwaye Press, Mandalay.

Hla Htun, Maung, 2004, *Japan Hkit Myanmar Gabya Sadan*, Pyinnyaye Sounnyi Pwedaw, transcript, Yangon.

Htay Maung, 2002, “Sit atwin Kala Saouk Sadanmya”, *Longmalay Magazine*, Oct. Yangon, pp. 136–

139.
Khin Maung Htun, U, 1975, "Myanmar Magazine", *Myanmarhmu*, Vol. 1, Tekkathomya Saouk Pyuzu Htoukweye Committee, Yangon, pp. 214–258.
Kyaw Aung, U & Kyaw Hswe, U & Maung Maung, U, 1975, "Myanmar Wuthtudo", *Myanmarhmu*, Vol. 1, Tekkathomya Saouk Htoukweye Committee, Yangon, pp. 121–137.
Lwin,Thakin, 1969, *Japan Hkit Bama Pye*, Udan Sapay Press, Yangon.
Malihka, 1974, *Myanmar Sapay Abeidan*, Vol. 2, Thissa Sapay, Yangon.
Mya Daung Nyo, 1943, *Yebaw Thoung-gyeik*, Myanmar Alin Press, Yangon.
Myanmar Nainghgan Saye Hsayamya Athin, 1943, *Saye Hsaya*, No. 9, Thuriya Press, Yangon.
— 1944a, *Saye Hsaya*, No. 10, Thuriya Press, Yangon.
— 1944b, *Saye Hsaya*, No. 11, Thuriya Press, Yangon.
Myanmar Pye Saye Hsayamya Athin, 1942, *Saye Hsaya*, No. 1, Thuriya Press, Yangon.
— 1943a, *Saye Hsaya*, No. 2, Thuriya Press, Yangon.
— 1943b, *Saye Hsaya*, No. 3, Thuriya Press, Yangon.
— 1943c, *Saye Hsaya*, No. 4, Thuriya Press, Yangon.
— 1943d, *Saye Hsaya*, No. 5, Thuriya Press, Yangon.
— 1943e, *Saye Hsaya*, No. 6, Thuriya Press, Yangon.
— 1943f, *Saye Hsaya*, No. 7, Thuriya Press, Yangon.
— 1943g, *Saye Hsaya*, No. 8, Thuriya Press, Yangon.
Myint Than, Daw, 1983, "Myanmar Gabya Thamaing (Hnahse-yazu)", *Myanmar Gabya Sadanmya*, Vol. 1, Sapay Beikman, Yangon, pp. 69–133.
Nyunt Kyu, Min Hla, "1942-khuhnit Naukpaing Myanmar Gabya", *Saouk Sapay*, Vol. 1, Sapay Beikman, Yangon, pp. 280–302.
Ngwe U Daung, 1979, "Myanmar Wuthtudo Thamaing", *Wuthtudo Sadan*, Vol. 1, Sapay Beikman, Yangon, pp. 11–32.
Oung Kyaw, U, 1974, "Kalay Lunge Sapay Hloukshahmu", *Kalay Lunge Sapay*, Vol. 1, Sapay Beikman, Yangon, pp. 1–70.
Pyankyaye hnit Pyidhu Hsethsanye Uzihtana Sati Aphwe, 2003, *Hnahse-yazu Myanmar Saye Hsayamya hnit Sazu Sayin*, Vol. 1, Pyankyaye hnit Pyidhu Hsethsanye Uzihtana, Yangon.
——2006, *Hnahse-yazu Myanmar Saye Hsaya hnit Sazu Sayin*, Vol. 2, Pyankyaye hnit Pyidhu Hsethsanye Uzihtana, Yangon.
——2008a, *Hnahse-yazu Myanmar Saye Hsaya hnit Sazu Sayin*, Vol. 4, Pyankyaye hnit Pyidhu Hsethsanye Uzihtana, Yangon.
——2008b, *Hnahse-yazu Myanmar Saye Hsaya hnit Sazu Sayin*, Vol. 5, Pyankyaye hnit Pyidhu Hsethsanye Uzihtana, Yangon.
——2008c, *Hnahse-yazu Myanmar Saye Hsaya hnit Sazu Sayin*, Vol. 6, Pyankyaye hnit Pyidhu Hsethsanye Uzihtana, Yangon.
——2008d, *Hnahse-yazu Sahso Sithemya*, Vol. 1, Pyankyaye hnit Pyidhu Hsethsanye Uzihtana, Yangon.
——2009, *Hnahse-yazu Sahso Sithemya*, Vol. 2, Pyankyaye hnit Pyidhu Hsethsanye Uzihtana,Yangon.
Pyi Soung (Thway Thauk), 2009, *Dutiya Gaba Sitkyi atwin Japan Letauk Yaukkezin*, SEIKU CHO CHO Sapay, Yangon.
Soe Nyunt, Yapye, U, 2005, *Hnahse-yazu Myanmar Saye Hsaya 100*, Yapye Saouk Press, Yangon.
Shwe Hmya, Dagon, 1972, *Myanmar Naingngan Sapay Hsumya*, Sapay Beikman Press, Yangon.
Than Nyunt, Myanmar Alin, 2004, "Dhadinza Hsaya Editor Aung Htu Saye Hsaya Aung Htu Dhadinza Letpwe Laik Yaungda Aung Htu", *Readers Journal*, Vol. 5, No. 28, Dec. 24, Yangon,

pp. 14.
Tin Moe, 1983, “Gabya Yedhu hnit Gabya Mwedhu i Atweachoung”, *Myanmar Gabya Sadanmya*, Sapay Beikman, Yangon, pp. 139–182.
Tint Win Naing, U, 2002, *Thalun Ingareik-Myanmar Eikhsaung Pyekhkadeing*, Kyi Thar Sapay Press, Yangon.
Win The, 2001, *Amyodha Lutmyaukye Taikpwe Khaw Than*, Gabaloung Sapay, Yangon.
Yan Aung, U, 1973, “Myanmar Naingngan Saouk Sazaung Htoukwehmu Khayizin”, *Saouk Sapay*, Vol. 3, Sapay Beikman, Yangon, pp. 807–847.

（英語）

Minamida, Midori, 2007, “Burmese Literature Written in the Dark”, Kei Nemoto, *Reconsidering the Japanese Military Occupation in Burma*（*1942–45*), Research Institute for Languages of Asia and Affrica, Tokyo University of Foreign Studies, Tokyo, pp. 113–139.

（日本語）

大阪外国語大学アジア研究会,『1940 年代アジア総合年表』, 1995, 大阪外国語大学アジア研究会, 大阪.
太田常蔵, 1967,『ビルマにおける日本軍政史の研究』, 吉川弘文館, 東京.
小山内薫, 1922,「息子」,『三田文学』７月号, 三田文学會, 東京, pp. 1–20.
小泉八雲, 1994,「鏡の乙女」,『天の川幻想』, 集英社, 東京, pp. 59–67.
島崎藤村, 1906,「家畜」,『中央公論』10 月号, 中央公論社, 東京, pp. 105–112.
火野葦平, 1939,「煙草と兵隊」,『文芸春秋』一月号, 文芸春秋社, 東京, pp. 358–367.
南田みどり, 1994,「事実が虚構をしのぐ時代の文学―テインペーミンの抗日時代」,『大阪外国語大学アジア学論叢』, Vol. 4, 大阪外国語大学アジア研究会, 大阪, pp. 107–163.
――2003a,「2002 年ビルマ―ヤンゴン大学周辺―」,『世界文学』97, 世界文学会, 東京, pp. 67–73.
――2003b,「「日本時代」のビルマ小説―『刀』をめぐって―」,『世界文学』98, 世界文学研究会, 東京, pp. 24–33.
――2009,「雑誌『女性問題』に見る小説の役割について」,『大阪大学世界言語研究センター論集』第１号, 大阪大学世界言語研究センター, 大阪, pp. 113–140.
――2010a,「日本占領期におけるビルマ文学―小説の役割を中心に―」,『大阪大学世界言語研究センター論集』第３号, 大阪大学世界言語研究センター, 大阪, pp. 109–136.
――2010b,「短編小説の語るビルマ文学最前線」,『EX ORIENTE』Vol. 17, 大阪大学言語社会学会, 大阪, pp. 29–58.
山本三生編, 1931,『小泉八雲集・ラーフェル・ケーベル集・野口米次郎集』, 改造社, 東京.

本稿は，2001 年度–2005 年度アジア・アフリカ言語文化研究所共同研究プロジェクト「日本占領期ビルマ（1942–45 年）に関する総合的歴史的研究」における研究活動を基礎に，平成 21 年度平成 22 年度の日本学術振興会・科学研究補助金，基盤研究（C）「ビルマ文学史における日本占領期」の研究成果を取り入れたものである。また，ビルマ国内の文学関係者をはじめとする多くの方々に協力をいただいた。心から感謝を捧げる次第である。

（2010. 12. 15 受理）